

岩下紀之先生をお送りする

中野謙一

本学文学部国文学科教授（大学院文化創造研究科国文学領域兼任）岩下紀之先生が、定年により本年三月をもって退職されることとなりました。名残惜しいかぎりですが、三十七年間の長きにわたり本学に奉職され、恙なく勤め上げられる先生に心より敬意を表します。

先生は一九八一年四月に本学部文学部講師として着任され、一九八四年四月に助教、一九八九年四月に教授に昇任され、現在に至っています（同じく一九八九年四月より大学院文学研究科教授、二〇一三年四月より文化創造研究科教授兼任）。ご着任以来、中世文学の専門家として国文学科専門科目を中心とする授業を担当されており、加えて一九九〇年四月より学生部学生課長を三年、一九九三年四月より学生部教務課長を二年、一九九七年四月より文学部国文学科主任を四年、二〇〇一年年四月より文学研究科長兼国文学専攻主任を四年お務めになるなど、数々の重責を果たされました。

そうした中にあっても、毎年一、二本の論文を欠かさず発表されてきたことは特筆すべきでしょう。先生は早稲田大学のご出身で、連歌研究の泰斗であった伊地知鐵男先生の門下に学び、研究者としての歩みを始められました。以来、連歌研究の継承・発展に注力され、世に出された著作は別掲の研究業績に収めきれないほど多数にのぼっています。それらを通じてみられるのは、対象領域の広さと考証の手堅さ、そしてユニークな着眼点などですが、いずれも同分野の研究者の

高く評価するところとなっています。

ご研究を特徴づける視野の広さは、もちろん授業でも遺憾なく発揮されています。長年ご担当になっている「国文学概論」(二年次)のシラバスには、前期に「和歌を概観」するとともに「日本語の表記について通覧」し、後期に上代から現代までの散文を解説するという授業内容が記されています。国語国文学の分野も細分化が進んでおり、こうした通史的内容を韻文・散文問わず扱える先生といえ、現在かなり限られているのではないのでしょうか。専門科目の充実を自負する国文学科にあっても随一たる岩下先生が退かれるというのを、われわれは重くうけとめねばなりません。概論とともに長年担当されている「国文学講義(3)中世」(一年次)で変体仮名の手解きをなさってきたこともあわせて、国文学の基礎・基幹の教育における先生のご功績は深大といえます。

最後に、少々個人的な思いを述べることをお許しください。先生は研究室のドアを開け放って書物を読んでいらつしやることが多いのですが、そのお姿は、学究とは斯くあるべし、と私の思う姿そのものです。読んでいらつしやるのがヘブライ語の文献であったりヒエログリフであったりすることからは、先生の関心の広さばかりでなく、飽くなき原典追究の精神がうかがわれます。先生は諸事に恬淡とされている中にも温かみを感じられるお人柄で、学生達からも慕われています。私も先生を慕う者の一人で、研究室がお近くになった頃から、特に日本史に関してさまざまなお話を伺うようになりました。不勉強の私を話し相手とする際、先生は物足りない思いをされているはずですが、五年前のご著書のあとがきでは「隣接する分野の専門家」として名前を挙げてくださいました。恐れ多いほど光栄なことでしたが、「日本史の」専門家とされたのはまことに汗顔の至りで、先生の温かい叱咤激励と受けとめ感謝申し上げます。

今後多くの書物に親しまれ、ご研究を深めてゆかれることと存じますが、どうぞお身体を大切になさってください。そして、時々には自転車であらりとキャンパスへいらしてください。変わらずご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(文学部国文学科主任)